

## 人口の十倍もの牛を放牧 島おこしを肉牛に懸ける

日本には、いったいいくつぐらい島があるかご存じだろうか。大は本州から小は瀬戸内海の小島まで、相当な数になるのは確かだ。ここで「島」の定義をいうと、総理府統計局によれば、「満潮時に海岸線の延長距離が百以上のもの」とされている。我々がイメージするものよりずっと小さいものも島なのだ。それを全部合わせると、何と三千九百余もあるという。世界でも有数の多島国だ。県別にみると、長崎県が九百七十一島でトップ。続いて鹿児島県の六百五島、北海道の五百八島の順になっている。

日本の島の特徴は、有人島が多いことである。人口一人などという島も含めて、約四百五十もの島で人々は生活を営んでいる。大部分の島では厳しい条件と戦いながら、独自の暮らしを続けている。

その四百五十分の一の島に、黒島というユニークな島がある。沖縄県八重山郡竹富町黒島。石垣島の南南西にあり、隆起サンゴ礁からなる低平な島。ハート形をしており、近年では、ハートアイランドのニックネームもある。



広さ十平方キ、人口二百人余の島のどこがユニークかというと、人口の十倍もの牛が放牧されていることだ。この島の特産品である黒毛和牛は「黒島牛」と名付けられ出荷されている。那覇市内で食べるビーフステーキの多くはこの黒島牛なのだ。

八重山諸島で肉牛が生産されるなんて信じ難いかもしれないが、この島の五つの集落地以外のほとんどすべての土地は、放牧地用に開墾されている。とはいえ、表土の薄い黒島では牧草を育てるのも、容易なことではなかった。

長年にわたつての土作りが、やっと実を結んだのである。

他の島にはない魅力を「牛の島」として広くアピールし、島おこしの運動が続けられている。